

第6章 悪夢

時々、悪夢で、うなされます。それは恐怖です。

「蜘蛛の糸」の悪夢

真鶴の駅に通じる道は急な坂道だ。私が振り返ると、おばあさんがいた。この人は、知り合いで、足が悪いと言っていた。その後ろに中年の男の人がいた。その後ろには、買物帰りのビニール袋を抱えた奥さんがいた。その後ろには、犬を抱いた女性。焼けた道の右側を一列に歩いていった。まるで芥川龍之介の童話『蜘蛛の糸』のように見えた。私はゾツとした。夏だというのに背筋が寒くなった。自分が地獄の底の韃陀多（カンダタ）に思えた。蜘蛛の糸を先頭で登っている韃陀多だ。この男は人を殺したり家火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊だ。しかし、一度だけ蜘蛛を殺さずに助けた事があつたのを、お釈迦様が思い出し、極楽の蓮池から蜘蛛の糸をたらして助けてくれることになった。

童話は鈴木三重吉主幹『赤い鳥』（赤い鳥社）大正七年七月一日発行の創刊号に掲載された。

日本人ならだれでも知っている。蜘蛛の糸が極楽と地獄をつなぐキーワードになっている。極楽と地獄は大人も子どもも興味のある永遠のテーマだ。そして、「自分一人でさえ斬れそうな、か細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事ができるのだろう」という不安が、読者を物語に引き込む。命の尊さも教えられる名作です。

私は、あの日の坂道の事を時々思い出して、みんなに「頑張れ、もう少しだぞ、大丈夫か」と声をかけたりする。

蜘蛛研究家の夫が、採集して来た蜘蛛を顕微鏡で観て、名前を付けていた。時々、「メスですね」「こちらは幼体です」などと呟いている。楽しそうだ。「御飯ですよ」と言うと、「麻酔をしてしまったので、あと三匹の写真を撮ってからにします。逃げたのが台所に二匹います」と言った。「昨日の採集は、そんなに採れたの？」ビンにウジャウジャいっぱいだね。たくさん採れて満足ですか。あなたは、きつと地獄に落ちるわ」。すると、「そんなことはない。韃陀多は、たくさん悪い事をして、一回だけ蜘蛛を助けた。僕は、一、二回は悪い事をしているかもしれないが、人助けとか良い事の方を、たくさんしている。捕まえた蜘蛛は死んでも研究のためだから喜んでいてと思います。僕が最も良い事をしたと思うのは、あなたと結婚したことです。どうですか？」と反論した。私は、夫の事を秘かに「極楽トンボ」と思っている。夫はこの事を知るはずがない。

「ゆり坊」の悪徳

クリーニング屋の駐車場で転んだ。暗かったので水道管が地上に十五センチほど突き出ている

のがわからなくて、つまずいて転んだ。夫が車の中で待っていて、「今、クリーニング屋から出て来たのに、突然いなくなつた。何をしていたの?」と言つた。エンジンをかけようとして前を見て、また視線を私に戻したら、いなかつたので驚いたようだ。

たいしたことはないと思つたが、どうやら足首を捻挫したようだ。毎日雨が降つて寒い。階段で左足に全体重をかけると、ズキンとする。「左足が使えなくなつた。階段が上れない」と夫に言うと、「それはいけない。シップを貼つて、サポーターをしなければダメです。なければ買つて来ます。すぐ戻ります。すぐです」と言つて薬局に行つた。その素早さに目を見張つた。「治つたと思つても続けるんですよ。油断すると今より悪くなります。歩けなくなります。いいですか」「はい」。夫は山形東高校のバレーボール部で、捻挫の経験があつた。

「サポーターがキツイ」「キツイぐらいがちょうどいいのです」「これつてSだよ。Mがよかつたわ」「あなたの足は、何センチですか?」「二十一センチよ」「見てごらん、Sは二十二センチから二十四センチと書いてある。これでいいのです」「ほんとうだ、よくわかつたね。すごい」。

サポーターをすると、本物の病人の気分になつた。ふさぎ込んで仕事が出来ない。ゆつくり歩いた。夫が階段の上り方を教えてくれた。「右足で階段を一段上がつてから、次に左足を添える。そうして一段ずつ上がる」やつてみると、なかなかいい。しかし、これでは時間がかかる。上まで行かない内に、手を使い、はいつくばつて上つた。次第に歩けなくなるといふ予感が頭をよぎつた。言葉数が少なくなり、うずくまつた。

十日後、「治つて来たわ。動物つて、どこか一ヶ所でも悪いと元気が出ないものね」「動物と来

ましたか。そのように弱っている時に、天敵に襲われるのです」「天敵?」。

ちょうど、テレビでは、中学生に噛みついたサルが捕獲された所だった。「山形県の小国町では、サルが増えているから、猟銃で撃つて、尻尾を切つて役場に持つて行くと三千円の謝礼がもらえる。死骸は山の道端に放置して置くとカラスやトンビなどのエサになる。食われてなくなる」と夫が平気で話した。

テレビでは、さらに難破した船から海に投げ出された人がサメに噛まれたというニュースが報道された。

潜水服を着た私「ゆり坊」が、サメに食われた。海水は一瞬真っ赤に血で染まった。頭の部分だけになった潜水服が引き上げられた。関係者は言葉がなかった。死んだ「ゆり坊」は、何も残さなかったという夢を見た。悪夢だった。

「ゆり坊」が、なぜ潜水服を着ていたかという点、テレビで映画監督のカメラマンが、世界初、一人乗りの潜水艦で最も深い海底の撮影に成功したというニュースが報道されたのを観て寝たからです。滞在時間は三十分。カメラマン監督は「タイタニック」の沈没現場にも行ったことがあるそうです。私は他人から影響を受けやすいタイプです。

◆ジェームズ・フランシス・キャメロン監督は、『ターミネーター』『エイリアン2』『アバター』『タイタニック』の映画で有名だが、三千時間以上の水中滞在記録を持つスキューバダイバーでもある。世界各地で難破船探索や深海調査等を行っている。

「イノシシ」の悪夢

一昨年、小田原の童謡の会に早く来た人たちが話していた。「イノシシが国道を東に走って行ったニュースが出ていたわね」「そうそう、毎年夏になると出るみたいね」「イノシシが当たったら、車はメチャクチャになってしまう」「交通事故になったら、危ないねえ」と、イノシシで、ワイワイと大盛り上がりだ。

昨年、「今年はウリボウが国道を東に走って行ったそうよ」「それ、私も今日の朝のニュースで聞いたわ」「ウリボウってイノシシの子どもでしょう」「背中の様子が瓜のようだから、ウリボウ」「親はどうしたのかしら」「この辺にいたらどうしよう。恐いわね」と、また小田原の童謡の会の人たちが話していた。今度はウリボウで大盛り上がりだ。「国道を東に走って行った」と言っているのは、箱根駅伝の選手が正月に走る湘南の海が見える、あの国道です。

今年、「小田原市の住宅街でイノシシが出没しているという通報があり、麻酔銃で捕獲したそうだ。イノシシは体長約六十センチ、体重約三十キロ、推定年齢三歳のメス」。読売新聞の写真のイノシシを見て、私は、やけに懐かしい親しみを感じた。それから新聞記事を読み進めて暗い気分になった。「山に放しても住宅街に戻る可能性が高いとして捕獲後、殺処分した」。去年のウリボウだったかもしれない。殺されたイノシシは、なぜ自分が死んだのか、全然わかっていなかった。無念の死だった。

「小田原の方角」の悪夢

小田原市の東西南北がよくわからない。小田原市には「東町」「山西」「南町」「北ノ窪」などの地名がある。北原白秋が愛した南町のお祭りは揃いの印半纏が粋だ。しの笛の音が聞こえて来るようだ。

小田原駅の「東口」を出て、まっすぐ行くと海に出る。駅の「西口」を出ると城山地区が広がる。私は、海側が南で、その反対側が北、太陽は東から昇り、西の箱根山に沈むと認識している。だから、駅の東口と西口の表札が不思議でしかたがない。

ある日、神奈川新聞で、小田原市の発掘調査の報告があった。小田原市は城の周辺の発掘調査を時々する。それには、「北條時代の街並みと、江戸時代の街並みは、方角が違っていた」と書いてあった。「なるほど」と思った。

しかし、まだ納得がいかない。私は大井町に住んでいて、小田原駅の隣りの小田急線新松田駅を利用してゐる。新松田駅の「北口」を出ると松田山がある。「南口」を出ると、はるかむこうに相模湾が広がる。東の旧第一生命ビルの山から太陽や月が昇り、西の箱根山に沈む。私は六十年以上も住んで、これを見ているから確かだ。

小田原駅の隣りの鴨宮駅も「南口」を出て、まっすぐ行くと湘南の海が広がる。反対側が「北口」です。小田原駅だけ海側が「東口」で、山側が「西口」では変だ。

夫が「小田原駅の所で、急にカーブしているんだよ」と言っただけで地図を持って来た。正確には「東口」は「東南」で、「西口」は「西北」だった。「あなたは、小田原駅も南口と北口にしてほしい

のでしよう。それなら、そう呼べばいいです。簡単な事です」と夫が平気で言った。この件は、それで簡単に終わった。

しかし、そう簡単なものではなかった。なんと、根府川駅は、元日には、ほぼ東向き四番ホームから、海から上がる初日の出を拝むことができる。つまり、一つしかない改札口は「東口」だ。東口を出て、まっすぐ行くと海に出る。太陽は西側のミカン山に沈む。小田原駅の隣の早川駅も同じ。真鶴町の三ツ石海岸は、初日の出の名所として有名だ。真鶴駅の駅員さんに「つかぬ事をうかがいますが、この改札は何口というのですか」と尋ねると、「何口？ここは一つしかないので、名前はありません」との事でした。

そういえば、子どもたちと行った静岡県焼津グランドホテルで、ベッドに寝たまま海から昇る日の出を見た事があった。私は、次第に小田原駅も「東口」と「西口」でいいのではないかと思い始めている。

「眠狂四郎」の悪夢

向こうから馬にまたがった茶髪の「眠狂四郎」が来る。番所からは、今まさに釈放された宣教師がヨロヨロと出て来た。牢で、クリスチャンを放棄すると約束して女を抱いた転びバテレンだ。「許さん」と眠狂四郎の剣が光り、その宣教師の外人を斬る。首は空を舞い、地面に転がる。「痛そう」。

眠狂四郎は、常に黒い着物を着ている。すらりとした細身だ。「市川雷蔵、日本一」。だが、

そのままヒラリと馬にまたがれるものなのか。「馬の背中は、けっこう広い。幅がある」と言う
と、夫が「鞍が置いてあるでしょう」と言った。鞍があっても、着物でヒラリというのには、何
か不自然な感じがする。どうなっているのだろうか。「眠狂四郎は、白いフンドシをしているのか、
それとも赤か」などと考えていたら眠れなくなった。

股旅姿の『木枯し紋次郎』（演：中村敦夫）は、着物の後ろを帯にはさんでいるから、すぐ馬
に飛び乗れる。「あつしには関わりのねえことで、ござんす」。

天下を統一した武将『織田信長』（演：豊川悦司）は甲冑を着ているので、もちろん馬に飛び
乗れる。「いむ、出陣！」。

人気時代劇『暴れん坊將軍』の徳川吉宗（演：松平健）は、金の刺しゅうの派手な袴だから、
毎回馬に乗って登場しても大丈夫だ。「皆の衆、元氣にしておるか」。

『眠狂四郎』は、どうか？「ビシッと決まった黒い着物姿から、馬にヒラリと飛び乗れるか、
いかがであろうか」と考えていたら、ますます眠れなくなった。

徹夜状態のまま、フラフラと『童謡を歌う会真鶴』の指導に行った。会員からの「唱歌と童謡
の違い」の質問に答えて童謡と唱歌の歴史を語った。帰宅して、「難しい事を優しく、優しい事
を深く、深い事を面白く、うまく話せた」と夫に言う、「うまくいったと自分で思っただけで、
実際には〈円月殺法〉の催眠術にかかった状態で童謡の会をやって帰って来たのではないか」と
驚くような発言が返って来た。「寝ていたかもしれない。夢の中で童謡の会をしていたかもしれ
ない」そう考えると、その夜も眠れなかった。

最近、「眠りサマ（眠狂四郎）」の事ばかり考えている。「女は抱くものと心得ておる」「円月殺法を御覧に入れよう」「かっこいい、どうしよう」。惚れっぽい私は、どうやら今度は映画『眠狂四郎』のファンになったようです。

『眠狂四郎悪女狩り』。眠狂四郎の名をかたり、大勢を切ったクリスチャンの男を円月殺法で倒して言う。「貴様を救う神があるか。俺も確かめに行きたいものだ」。このセリフが最後。私が、「最終回がドラマとしては一番好い出来だったわ」と言うと、夫が「この頃の市川雷蔵は、病の身をおして点滴をしながら出演していた。翌年、癌で死んだ」と思いがけない事を言った。若き市川雷蔵は、映画の中で命を使い果たしてしまった。時代劇『眠狂四郎』は不滅の名作となった。

「綱引き」の悪夢

合図のピストルが鳴って綱引きが始まった。「紅組がんばれ」「白組がんばれ」。子ども、大人も声の限りに叫んでいる。ズルズル引かれて、中央の目印の白い線から私の足が出た。途端に終了の合図のピストルが鳴った。白組の負けだ。続いて場所交替。

二回戦。合図のピストルが鳴って、綱引きが始まった。「紅組がんばれ」「白組がんばれ」。子どもも、大人も声の限りに叫んでいる。ズルズル引かれて、私の足が出た。途端に終了の合図のピストルが鳴った。二回戦も白組の負けだ。私の足が出るのと同時にピストルが鳴る。負けた責任を一身にかぶって、毎回綱引きは終了した。私は小さいので一番前に並んでいる。この屈辱は、一番前に並んだ事がない人にはわかるはずがない。最もわかっているのは、教師だろう。運動

会には、一つも楽しい思い出がない。

「川の流れの上と下では、流れる方向に引いているチームが勝つ」と言う人がいたが、真相はどうなのだろう。あてにはならない。

ところが、この話を夫にすると意外な事を言った。「あなたの足が出ると負けというのは、おかしいね。まるで負けた責任が、全部あなたにあるようだね。僕は、背が高いので綱引きは最後尾にいた。ピストルが鳴っても、どちらが勝ったか負けたか、わからなかった。なにがなんだかわからないまま、いつも綱引きは終わった」と言った。「人によっては、そんなこともあるのか」と、私はあきれた。

「接骨院」の悪夢

小さい頃の事は、ほとんど覚えていない。好い事が何もなかったので、脳の方で、勝手に思いを削除するようにセットしてしまっているようだ。夫が「何も覚えていないとは、小さい頃は、バカだったのではないか」と言う。しかし、時々思い出す悪夢がある。

私は、だれかに甘えたいという願望が常にあった。母に後ろから抱きつく。これは、普通に子どもがする甘えの行動だが、母は嫌がった。大人になった私は、それを思い出して、「仕事が忙しくて疲れていたからだろう」と思う事にした。母は小学校の教員であったが、実際は、自分の子どもを、どのようにあつかえばいいのかわからないでいた。

ある日、小学校の休み時間に、担任の先生に後ろから抱きついた。すると先生は私の両手を前

にグツと引いた。他の子も、次々先生に後ろから抱きつき、先生は同じようにした。先生に遊んでもらって、みんな楽しかった。嬉しかった。そして、そのまま帰宅した。

しかし、次第に肩が痛くなった。夕方、父の自転車の後ろに乗って松田町にある接骨院に行った。夏の六時ごろで、まだ明るかった商店街の中を「痛いよー、痛いよー」と、ありったけの大声を張り上げて泣く私の声が響き渡った。父に甘えて泣いた。その泣き声は今でも蘇ってくる。

接骨院に行くと、「どこが、いてエんだ、ここか」と、恐そうな先生が肩に触り「エイッ」と声をかけると、たちまち治った。関節が抜けていただけだった。しゃくりあげている私に、先生が「どおだア、まだ、いてエか?」と地元の言葉で聞いた。ヤクザの親分のような人だったので、私は恐ろしくて泣くのをやめた。父は、接骨院の先生に何度もお礼を言った。父は小学校の教員であったが、そのような時、だれよりも腰が低かった。私には「もう、よし。サツ、帰るぞ」と言った。そして、そのまま帰宅した。甘えている暇など一刻もなかった。私の家では、家族でゆっくりする、話をして笑い合うという事が、なかった。両親は共稼ぎ、私は一人っ子で鍵っ子だった。毎日が忙しく、せわしなく過ぎて行った。

翌日は、何事もなかったかのように登校した。小学校の担任は、気が付いていなかったのだから、当然、謝りに来なかった。今だったら町長、教育委員会、マスコミを巻き込んで、大事件になつていただろうが、親も担任も、のんびりした時代でした。

今日、接骨院の前を通ると、看板がはずされた跡が残っていた。「この腕のいい接骨院も一代で終わってしまったのだな」と、しんみりした。

「級長」の悪夢

中学校の時、毎回学級委員に選ばれる人がいた。がっしりした体格で、温和な性格、成績もよかつたので、みんなから信頼されていた。私も好きだった。

ある日、「おはよう」と声をかけられた。そして意外な事を言われた。「ああ、今日は、あなたと話ができてよかったわ。毎日、夜寝る前に、クラスの全員の顔を思い浮かべて、声をかけたか考えるのだけれど、いつも、あなただけ、声かけができていないのよ。明日こそ、と思っても、かなわない事がほとんどなの。一日の学校生活で、必ず一回以上クラスの全員に言葉をかけるように心がけているのよ」と。「なるほど、そうだったのか」。それにしても、私の方は学級委員が、毎日必死で声をかけようと私を捜していたとは全く気がついていなかった。

私は担任から「覇気がない」と言われ、日々、元氣なく黙って暮らしていた。担任から「これだけの文が書けるのだから、順序立てて話をしてみる」と叱られても、次第に人前で話をしなくなつて行つた。何事もなく一日が過ぎる事だけを願っていた。学校ではひたすら本を読み、うつむいて静かにしていた。だれとも話さなかつた。家では夜遅くまでピアノを弾いて、ピアノのレコードを聴いて暮らした。笑う事がなかつた。

その時は、それで終わったが、今になって学級委員を尊敬している。「これはすごい事だ。すばらしい」。

今、私は中学の時の学級委員を見習つて、童謡の会で受付に立ち、会員に声をかけている。一言でも会話をしようと頑張るが、大勢いる会場では、なかなか難しい。

「テレビ出演」の悪夢

「チツチキチー」「そりゃあ、なんだんねん」「しりまへん」で、一世を風靡した関西の漫才「大木こだま・ひびき」の前座になぞかけて出演した。

「六十歳なのに、右手が上まであがらなくなっただんですよ。痛くて痛くて、ほら、いててて」。「六十にして五十肩とはこれいかに」「整いました」「富士山の雪とトク」「いやあ、きれいですね。して、その心は?」「なかなか氷が解けない」「なかなかコリが取れない、ですかア。ちよつと苦しいですわね」。司会の女のアナウンサーが怒った。「やってしまいましたねえ。『ゆり坊&シブ玩具(TOY)』の夫婦漫才は、出演をやめてもらいます。このような低次元のタレントをテレビに出すから世の中が悪くなるのです。子どもの教育に悪い影響を与えるのです。テレビの視聴率が下がっているのです。すると白いピエール・カルダンのスーツを着た司会の中村敦夫さんが飛んで来た。「初めての謎かけにしては、すばらしかったですよ。なかなかいいです。次回、違うネタでお願いします」と言った。そして神経質そうに笑った。悪夢だった。

◆「五十肩」とは、次の三条件を満たすものをいう。「肩に痛みと運動障害がある」、「患者の年齢が四十歳以降である」、「明らかな原因がない」。

「罪」の悪夢

深夜、ファミリーストランに行くとき女と男が一番テーブルにいた。私と夫は二番テーブルに案内された。私は女と背中合わせに座った。

女と男の話が、途切れ途切れに聞こえて来た。「明日、息子が出所して来る。どちらが迎えに行くか」「これから、どこに住むか」「仕事をどうするか」「貯金はいくらあるか」。そのたびに、「世間体」という言葉が何回も出た。私は、ゾツとした。

平成十七年、私は九十歳になった両親の介護と、任された土地の草むしり、なれない野菜作りに追われていた。食事もろくに取らず疲れ切っていたので、夫がレストランに誘ってくれた。深夜だというのに、店内には客が何組かいた。それぞれに事情がありそうだった。

注文したクリームソーダとオムライスが運ばれてきた。女と男の話を聞いてしまった私は、ますます食欲がなくなり、オムライスを半分しか食べられなかった。事情がわかっていない夫が残ったオムライスを食べながら、「レストランに来るとクリームソーダを注文するなんて、子どものようですね。手のかかる少女Sだ」と言った。私たちが席を立ち料金を支払っても、女と男は、まだ話し込んでいた。

どんなに小さいな事件でも、世間は「罪」を許しません。長い時間、四十年も五十年も経過しても、それは消す事ができない。「おや？」と思つて過去を調べれば、すぐにわかつてしまう。親しくなった人が、そんな人だったら、どうですか。「お茶でもしませんか」と誘われたらどうしますか。

「自転車」の悪夢

私は小さいので二十インチの緑色の自転車に乗っている。買った時から気に入っている。白い毛糸の帽子を被り、マスクをして、ピンクの襟巻、赤い手袋をして信号機のない横断歩道の所で

停車していると、必ず車が止まってくれる。バスも、タクシーも止まる。私は急いでいないので、いつ渡つてもいいと思つている。なぜ、車が停車するのか、理由があります。私は小学生に見られているようなのです。

それが何より証拠には、私の自転車を追い抜いたおばさんが、「真ん中走っていると危ないよ」と声をかけてくれたりする。それは、まるで子どもへ声かけをしているようだ。「はい、どうも」と返事をする、私の大人の声に相手は仰天する。仰天しているのが手に取るようにわかる。

坂道を自転車の上つて来る親子に出会つた。子どもは幼稚園ぐらいで、自転車用のヘルメットを被っている。かわいい子だ。母親が「お姉ちゃんの自転車を先に通してやって」と言つた。男の子は坂の下で自分の自転車を止めた。私は、「どうも、ありがとう」と言つた。母親が驚いているのがわかつた。孫のいるおばあさんの私を、小学生と思つたのだから驚くのも無理はない。体は小さくて小学生に見えても、声は隠しようがない。おばあさんの声だ。

妄想サイクリング

さあ、みんなでサイクリングに行こう。秦野市の桜土手古墳公園めざして出発だ。先頭は『ドラえもん』と『ドラミちゃん』、兄妹仲がいいね。「ハンドルは握れるかな」。続いて『ひこにゃん』と『くまモン』は、ゆるキャラ一位だね。「二人共、はしゃぎすぎ」。続いて、『金時娘さま』と『よいしよ君』、ほがらかに行こう。「金時娘さま、頑張つて！ よいしよ君が守つているよ」。しんがりは『しいたけ侍』と『ゆり坊』。ゆり坊は、NHK『塚原卜伝』の小田原撮影の時に譲り受け

た「鹿島の太刀」を腰に、「いざ、出発！」。おや？ 酒匂川の河川敷で練習をしていた『野球チームの低学年』も自転車に乗ってついて来た。大きな野球用のヘルメット可愛いね。スライディングの練習でユニホームが泥だらけ。

子どもだけでは危険なので、大人を頼むことにした。『二宮尊徳先生』がいい。「承知いたしました。ケガのないように楽しく行きましょう」。それから、もちろん『木枯し紋次郎サン』にも引率をお願いした。長いやりとりがあった。

「池田一家の お身内衆ですな」「あつしは、何も頼まれたくねえんで」「頼まれごとなら ごめんなすって」「あつしには かかわりのねえこつて」。ゆり坊が、「ねえねえ、お願い！ 木枯しサンの分も、〈鳥ぎん〉の釜めし弁当が用意してあるよ」と言うと、「用があるなしだけのご縁でござんす。つきましては 渡世の挨拶は省かせていただきます」などと言って、ようやく一緒に来てくれることになった。天保の飢きんの時代の人なので、食糧の誘いには弱い。しかし、二宮尊徳先生と木枯し紋次郎サンは、一言も口をきかない。バクチなどの社会道徳の見解の相違で、そりが合わないのだろう。尊徳先生は、ギャンブルやヤクザは世の中から追放したいと考えている。一方の紋次郎サンは、バクチを生活の糧にしているヤクザだ。大人の世界は難しいものがある。紋次郎サンは、「あつしは 一人旅と決めておりやす」と言って、遅れてついて来た。「紋次郎サンは、すねているんですよ」「すねものでなかつたら、こんな渡世は できやせん」。桜が満開、お花見楽しいね。

「押し売り」の悪夢

小さい頃の思い出の中に必ず出てくるのが押し売りです。母は、押し売りが来ると必ず買った。

「ゴムひも売り」は、顔にキズがある恐ろしい顔の男だった。玄関に五種類ぐらいのゴムひもの束を並べた。母は、それを全部買った。

当時は、ウエストに、ゴムひもを入れたスカートが主流だった。だれもが自分で履くスカートは自分で作っていた。母は自分でスカートを作った事がなかった。

「ほうき売り」は、畳を掃くほうきを売りに来た。「だんだん畳の家が無くなり、みんなが掃除機を使うから売れない」と聞くと、母は一本買った。母は家の掃除をすることがなかったのに、毎回買うので、ほうきが家の中に十本、二十本とたまって行った。今は、私が使っている。

「ワカメ売り」が持つて来たワカメは、「二、三本ずつ白い紐で束になっていた。母は「いくらよ？」と聞いてから、それを全部買った。「朝採ったばかり」「全然売れなくて」「一つでも買ってよ」と言われると、買わないわけにいかないようだった。「娘が車椅子の生活で、月に一度月経が来ると血だらけになる。世話が大変」などと聞くと、「大変だアねえ」と同情していた。六十年前でも、ワカメは近所の魚屋で、マーケットで、いくらでも手に入った。それでも、母は押し売りの老婆を憐れんで買った。

「鶏肉売り」は、毎月山北から自転車で来た。「鶏を沢山飼っていられるの?」「楽しみでやっている」と言うおじいさんだった。母はあまり料理をしないので、鶏肉は冷蔵庫の中にたまる一方だった。腐って捨てられることが多かった。それでも、せっかく来てくれるのだからと買った。

ひき肉、モモ肉、卵など。

ある日、「今日でお終いです」と言つて鶏肉売りのおじいさんが来た。おじいさんは、自転車に乗れなくなり、息子の白い大きな乗用車に乗せてもらつて売りに来た。母は、持つて来た鶏肉と卵を全部買った。「元気でねえ」と門の所まで出て、その車を見送った。それが我が家に来た押売りの最後だった。

私の代になると、土地建物関係の営業マン、保険の外交員が次々来るようになった。「間に合つております。結構です」と断り続けている。「何が間に合っているのですか？」とか、「それでは、ご説明をしなくていいというのですね。ワツかりましたアーツ」などと言ひ返されると、殺されるのではないかとゾツとする。そんな毎日を送っている。

「お迎え」の悪夢

平成二十四年八月二十九日、NHK『クローズアップ現代』で「天国からのお迎え」を放送した。先に死んだ親兄弟、親友、かわいがっていたペット、故郷などが夢枕に出て来て、その後、安らかに成仏できるというのだ。

死んだ後の事を誰も経験していないから、何とでも言える。まるで怪しい宗教番組のようだ。「これって、NHKなの？」。

その晩、夢枕にいろいろな人が出て来た。私の記憶にある死んだ人たちだ。「私はいかが？ お迎えに来ましたよ」「僕ではどうですか？一緒に行きましょう」。私は断り続けた。最初は、き

然とした態度で穏やかに、にこやかに断っていたが、終いには「これから童謡の会を始めるといふのに、そのような事を言つて、何が楽しいのですか。やる気をそぐような事を言わないでいただきたい。そもそも、教師のような口調にはウンザリです。良いか悪いかは、私が判断して決めます。帰つてもらえますか」と、暴れまくつた。だれが迎えに来てでも一緒に行きたくないと思つた。科学的に、ありえない事です。

自分が弱つて死んで逝く所など、だれにも見せたくないし、見られたくない。それが、わからない人が多い。

「そっくり」の悪夢

夫と食事をしている。顔を見ると義父にそっくりだ。まるで義父と一緒に食事をしているようだ。「嬉しいでしょう」と夫が笑つた。

私も、母に似て来た。童謡の会で「このようです。おわかりになりましたか」などと言つていく所が、母にそっくりだ。

「遠野物語」の悪夢

平成二十七年（二〇一五年）、新年早々の新聞の投書欄に「子どももいない私を一人残して逝く事を案じながら、夫は癌で亡くなりました。優しい人で、生まれ変わる事ができたら必ずまた一緒にになりたい。私の最愛の人でした」と書いてあつた。これを読んだ私は、「享年六十八と

は残念だなあ」と思った。そして、柳田國男著『遠野物語』の九九を思い出していた。

「九九 土淵村の助役北川清の弟に福二という人がいた。福二は海岸の田の浜へ婿に行つた。そして先年、大津波に遭つて妻と子とを失つた。生き残つた二人の子と、元の屋敷の地に小屋を建てて一年が過ぎた。

夏の初めの月夜に便所におきた。便所は遠く離れた所にあり行く道も浪の打つ渚だった。霧の布（し）きたる夜だった。その霧の中から白い着物姿の男女二人が近づいて来て、目の前を通り過ぎようとした。すれ違いざま女の顔を見ると、わが妻だった。思わずその跡をつけて、はるばると船越村の方へ行く崎の祠（ほこら）のある所まで追つて行き、名前を呼んだ。すると女は振り返りニコツと笑つた。一緒にいる男を見ると、これも同じ里の者で、津波の時死んだ者だった。女は、「今は、あなたが婿に来る以前に互いに互いに深く心を通わせていたこの人と夫婦になつて、あの世で幸せに暮らしております」と言つた。福二が「この世に残した子は可愛くはないのか」と言つと、女は少し顔の色を変えて泣いた。

これが死んだ妻か、福二は死んだ妻が、このような事を言うとは思つてもみなかった。悲しく情けなくなり足元を見ている間に、男女は再び足早にそこを立ち去つて、小浦（おうら）へ行く道の山陰を廻り見えなくなつてしまつた。福二は必死で追いかけた。しかし、妻は死んだ者だと気付いて、夜明けまで道中（みちなか）に立つて考え、朝になつて家に帰つた。その後、久しく煩（わづら）つた。

「煩う」とは、「思い悩む。なやみ。心配。苦勞。迷惑。病氣。やまい」などの解釈がある。私

は、この救いのない話を、ことのほか気に入っている。

「ぞうさん」の悪夢

ある日、童謡の会に子どもが来た。「見学をさせてください。よろしくお願いします」と言っ
て頭をさげた。最近は大人も見学をさせてほしいなどと挨拶はしないのに。「何が歌いたいの？」
「『ぞうさん』が歌いたい」と、その男の子は言った。「では、みなさん、この子のリクエストで
『ぞうさん』を歌います」と、私が言うと、驚く展開になった。

会員全員が立ちあがった。そして発声練習を始めた。ピアノに合わせて「ドミソミド」ジャンー
「あああああ」ジャンー「ええええええ」ジャンー「いいいいいい」ジャンー「どんどん高くなって行く。
ヒーヒーしている人も、まだまだ高く。次は同じ音を長く延ばす。大きく息を吸って、少しずつ
吐く。「まあー」一音高く「めえー」もう一音高く「みいー」どんどん高く。次は、お腹に手を
当ててスタツカートで、「ドミソミド」ジャンー「は、は、は、は、は、は、は」ジャンー「へ、へ、へ、
へ、へ」ジャンー「ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ」ジャンー「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」顔は、にこやかにほ
ほ笑んで。「あ、え、い、お、う」ジャンー「か、け、き、く、こ」ジャンー「さ、せ、し、す、
そ」……三十分も発声練習をしたので、みんなヘトヘトになり、喉が痛くなった。ゲンゲン咳き
込んでいる人もいる。

指揮者が指揮棒を構えると、全員が「ガタン」と音をたてて足を肩幅に開いた。昔どの合唱団
でもやっていた姿勢だ。そして、手を後ろで組んだ。いよいよ『ぞうさん』を歌うのだ。前奏が

始まり、「♪ぞーさん　ぞーさん　おーはなが　ながいのねー」みんながオペラのように声を震わせて高らかに歌った。男の人たちは胸をのけぞらせている。女の人たちは鼻高々だ。

指揮者は何度も「出だし声をそろえて。一齐にブレスするんだ」「同じ響きで、もう一度。そりゃあイビキだろう」「明るい声が欲しいんだが、暗いねえ。足を引つ張っている人がいるぞ」「もつと耳を使って。音が取れていない人がいる。全然違う」「ボロ雑巾を引きずっているようだ。こりゃあ合唱じゃあない、雑草だ」「スカスカの声はダメだ。ヒビの入った土瓶から水がもれているようなものだ」「吐く息に声を乗せるんだ。ダメだ、ダメだ」と注意した。

男の子は歌わなかった。そして言った「これは、僕が知っている『ぞうさん』じゃあない。僕が歌いたかったのは童謡の『ぞうさん』だよ」そして、「僕、もう帰る。ウチのおばあちゃんと一緒に歌うからいいよ。バイバイ」と言つて、いなくなった。これは悪夢だった。

「昔、合唱団で歌っていました。パートはアルトでした。今は声が出ません。童謡の会でも発声練習をしてください」と言う高齢者が入会するたびに、私はこの悪夢に悩まされる。

「赤ちゃんに童謡を歌つて聞かせる前に、発声練習をしますか？」

「高齢になると声が出なくなります。艶（つや）がなくなります。あなたは何歳ですか？」

「童謡『とんぼのめがね』は、ハ長調で、中央ドから一オクターブ上のドまでです。これくらいの音域が出ないと、歌は歌えません。いかがですか？」

「あなたが穏やかな声で歌った時、童謡は美しい色で温かい」。

「佐藤しのぶ」の悪夢

昭和六十二年（一九八七年）の『NHK 紅白歌合戦』の出演者の中にオペラ歌手の佐藤しのぶさんがいた。佐藤しのぶさんは困っていた。オペラに出演する時は、ピアノのある控室で発声練習を一時間も二時間もする。ところが、紅白歌合戦に出場する演歌やフォークやポップスの歌手たちは、だれも発声練習をしていない。

困った佐藤しのぶさんは、トイレに入った。トイレで発声練習をした。驚いたのは他の歌手たちだった。紅白初出場本番では、『オンブラ・マイ・フ』を見事に歌い切り、聴衆を唸らせた。それから紅白歌合戦に四年連続出演した。トイレでの発声練習は伝説になっている。

◆佐藤しのぶは、国立音楽大学声楽専攻卒業。文化庁オペラ研修所に最年少で入所し首席で修了。文化庁芸術家在外研究員としてイタリアミラノへ留学。『椿姫』でデビュー。主役を演じる。帰国後のリサイタルではイタリアオペラを歌い、衛星放送を通して世界へ披露された。その後『トスカ』『蝶々夫人』などを次々に演じた。著書『佐藤しのぶ 出逢いのハーモニー』（東京書籍）。

「なりたいもの」の悪夢

「なりたいもの」「したいこと」は沢山ある。

ある日、神奈川県南足柄市の観光PRキャラクター「よいしよの金太郎（通称「よいしよ君」）」になった。ステージ上で悪者から逃げ回っていると、客席に転落し気絶した。すぐに救急車が来た。救急車の到着の、あまりの早さに仰天していると、レスキュー隊員の言葉が、かすかに聞こ

えた。「右手を上げてください」「左足を上げてください」「右と左がわからないようだな」「着ぐるみは脱がせられないから、そのまま乗せて運ぼう」「どこの病院も、いっぱい受け入れられないそうです」「足柄上病院は、土曜日なので医師がいらないそうです」「ドクターヘリで東海大学病院に搬送しますか」「それがいい」。

消防車が、酒匂川の河川敷の野球少年たちに中止を促し、グラウンドに放水した。ヘリの砂埃を防ぐためだ。救急車が到着すると、同時に東の空からドクターヘリが飛んで来た。土手の上で見ていた野次馬のオバアサンが「早くしろー」と怒鳴っている。心配をして奈良県葛城市のマスコミトキヤラクター「蓮花ちゃん」も駆けつけて来た。親友の「金時娘さま」も、およばずながらと、金時山から来てくれた。大事になった。

赤い旗が降ろされ、白い旗が振られると、ドクターヘリはプロペラの爆音を響かせて浮き上がり、東の空に飛び立って行った。土手の上の野次馬のオバアサンが「助かるといいねえ」と呟いた。この間、連係プレーで、時間にして二十分間の早業だった。私は、小さい体をいかして「着ぐるみで活躍したい」と思っていたが、やめる事にした。ドクターヘリを見て興奮したので夜は寝られなかった。悪夢だった。

翌日、平成二十五年三月二十四日、NHKスペシャル『完全解凍！アイスマン〜五千年前の男は語る〜』を観た。アルプスの氷河で発見された約五千年前の冷凍ミイラ「通称アイスマン」の解凍・調査を取材したもの。これまでは、死因は寒さでの凍死とされてきたが、新しい見解が発表された。

アイスマンは、だれかに追いかけられ、アルプスの山や野を逃げ回っていたらしい。体内から、いろいろな植物の花粉が採取された。鉄の矢じりで後ろから突き刺された。精錬の技術が進んでいたことになる。こめかみを石のような鈍器で殴られ止めを刺された。脳に内出血の跡があった。あお向けに倒れたので、背中に刺さった矢じりを抜くため左手を曲げさせられた。不自然に左手が曲がっているのはそのためようだ。殺人者は、痕跡を残さないように背中に刺した自分の矢じりを持ち去った。今回、脳や体内から摘出された物の一部は、もとにもどされた。今の文明より進んだ時代に、さらなる研究が期待されるからだ。私は、「ミイラになりたい」という願望を以前から持っていたが、やめる事にした。私が、「小さいから、子どものミイラと思われてしまうわ」と言うと、夫が「その心配はありません。骨盤のレントゲンで、出産した事がわかります」と真面目に言った。アイスマンを見て興奮したので、夜は寝られなかった。悪夢だった。

「花泥棒」の悪夢

真昼の庭で「ボキン」という音が聞こえたので外に出てみると、大きな帽子をかぶった老婆がピンクのアジサイを、まさに盗む瞬間だった。「花泥棒」「何をされているのですか」「ちよっと、あんた」など、かける言葉を考えたが、手が痛くならないように、ハサミを貸してあげようと思った。ハサミを取りに家の中にもどって、もたもたしていると、その花泥棒は、いなくなっていた。自転車で追いかけた。今度は、隣のアパートの道に面した庭に咲いているピンクのツツジを盗もうとしていた。ツツジは今、まさに満開。手には、すでに我が家で盗んだピンクと青のアジ

サイを持つていた。私は言葉を考えてから、「こんにちは、ハサミを貸しましょうか」と言った。すると、花泥棒の老婆は、振り返り、世にも恐ろしい顔で私を見た。これほど恐ろしい顔の人間を生まれて初めて見た。金縛りに合い、立ちつくしている、坂の下から人柄のよさそうな奥さんが来た。奥さんは買物に行くようで、財布を持つていた。「こんな所にいたの、娘さんが捜していたわよ。車で出かける約束だったでしょ？娘さんが『どこへ行ったのかな』と言つていたわよ。一人で勝手に出て来ちゃったの」と言った。その世話好きな奥さんは、老婆の家の隣りの人のようだった。

私は、この町に生まれてからずっと住んでいるが、老婆も、奥さんも知らない人です。きつと、娘が新しい家を建て、母親を迎えて一緒に住むことにしたのでしよう。「娘さんは、これから大変だ」というのが、一番の感想です。花は、仏壇に飾るのでしよう。盗んだ花を飾つて、嬉しいでしょうか。「いつも、いろいろな花が咲いていてきれいですね。一ついただけますか」と言つてくれれば、私は、「たくさん咲いています。ほしい花は、どれですか」と言います。ハサミを貸してあげます。

「殺害」の悪夢

暗闇の中に男が立った。男は言った。「地獄に仏は、無用だ、死ね！」と。そしてジャックナイフで私の腹を刺した。「ヒーツ、痛いよ」。私は即死した。ベッドは血だらけで、男の顔は返り血で真っ赤だった。男は玄関から逃走した。玄関には血痕が落ちていた。男がふりかえつて恐ろ

しい形相で言った。「一度、人を殺してみたかったんだ」と。悪夢だ。

私は中学校の時から、よくこの夢をみる。原因は噂話だ。「先生が、ジャックナイフで刺されて死んだんだって」「自殺したって聞いたよ」「ベッドは血の海だったそうよ」。何がなんだかわからないまま、私は中学校を卒業してしまった。本当はどうだったのか。

木枯し紋次郎が私の肩に手を置いて言った。「噂というものは、そんなもので ござんす」「あつしは長く生きてえと思つたこともねえ。死ぬ時が来たら、死ぬまでだ」。

紋次郎にも悪夢が襲つた。画面には大きく梵字ぼんじが出る。夜、荒涼たる河原、白と黒と青の世界だ。不気味な男たちが一斉に紋次郎を襲つた。紋次郎は長ドスを抜こうとするが、抜けない。白装束しょうぞくの真つ青な顔をした男が切りかかつて来た。稲光いなびかりがする。「死ね、紋次郎」グサツ、ドスツ。抵抗できないまま切られた。意識が薄れて行く。地獄からの恐ろしい笑い声が響く「ワッハッハッハ」。朽ち果てた民家の馬小屋で眠っていた紋次郎は全身汗まみれで目が覚めた。悪夢だった。(第十七話「無縁仏に明日をみた」)。

私は、この導入部分が、とても気に入っている。何回観ても「紋次郎サン、あぶない！」と叫ぶ。「妙なめぐりあいだ、ございやした。ずいぶんと、おたっしゃで」。テレビ時代劇「木枯し紋次郎」は、永遠のアイドル。私の「タイプ」です。

「取り返しがつかない」悪夢

あつてはならない事がおきた。平成二十五年六月二日未明、茨城県水戸市で火災が発生。火元

の家と隣接する三棟を全焼し、火元の夫婦が行方不明になった。二日の午前、住宅一階部分から身元不明の遺体一体を発見した。正午頃には別の遺体の一部とみられる部分を見つけたが、水戸署員はこの家の室内で飼っていた小型犬の死骸と思ひ込み、現場で家族に引き渡した。この家では犬を二匹飼っていた。四日午後になって、家族が水戸署に「これは犬ではなく人の遺体ではないか」と連絡し、五日に司法解剖した結果、人の腰部と判明した。……私は新聞を握りしめて泣いた。犬の死骸と間違えられて粗末な扱いをされた遺体は、いかばかりか。自分が犬の死骸と間違えられたらどうか。取り返しがつかない事です。

取り返しがつかない究極の悪夢は、身近にいくらでもあるものです。わが家の新聞受けは、道に面した門の所にある。春、寺（真言宗）で檀家の集まりがあった。欠席の連絡をしておく、なんと、新聞受けに寺で配る「板塔婆」が差してあり、中に「供物（近所の洋菓子店のマドレーヌ）」と会計報告などの「プリント」が入っていた。それを見て道行く人が指をさし、笑いながら通った。抗議の電話をすると、住職は酒に酔っていた。

しばらくすると、住職は亡くなり、息子が住職になった。春、寺で檀家の集まりがあった。欠席の連絡をしておく、なんと、今度は自転車のカゴに「板塔婆」と「供物（マルの図柄の入った小さいタオル）」と会計報告などの「プリント」が放り込んであった。「板塔婆」を握りしめて泣いた。「板塔婆」は、信仰上最も重要な物の一つです。住職の人柄が問われます。信頼できない住職には、供養は任せられません。

私が寺に不信感を抱いたのは言うまでもない。平気ではいられないのが普通の感情です。取り返しがつかない事です。怒りがこみ上げて言葉が見つからない。寺は、おいそれと途中で簡単にかえるわけにいかない。

◆「真言宗」は、弘法大師空海によって伝えられた。「板塔婆」は、五輪塔が変化したもので、お墓の後ろに立て、先祖を供養するもの。空・風・火・水・地を示す梵字が書かれている。

「土下座女」の悪夢

だました者が良い人生を送り、だまされた者が悪い人生を送ることがあつてはならない。だました者が孫と犬を連れて散歩を楽しんでいて、その家から笑い声が響いている。多額の金を貸して、だまされた年寄りが泣き寝入りをして、わが家から笑いが消えた。これはおかしい。まじめに生きた者が、人生の成功者でなければならぬ。わが家の玄関で巨体を丸めて「土下座」をした女が堂々と生きている。

平成二十五年三月二十九日の新聞を見て、がく然とした。記事は次のようでした。

「小田原市飯泉の住人(当時六十六歳)が殺害された事件で、強盗殺人容疑で逮捕された男(無職四十歳)は、借金を繰り返し、秋葉原のアイドルにつき込んでいたと供述した」と。この場合は、お金を貸した者が殺されてしまった。死人に口なし。本当の事は、語られないまま闇に葬られた。最悪の事態だ。殺害された人は、悔しいに決まっている。

母も、せがまれるままに、お金を貸した。

「明日、必ず返すからサ、お金を貸してくんない？」「葬式があるの、一緒に行かない。亡くなった○○さんの事、知っているでしょう。行かなくていいの？ 香典代貸して」「母が危篤なの、帰る旅費が必要なの、お金を貸してよ」。

どん底にいる相手は、死に物狂いで迫って来た。母は、そんな事とは知らなかった。小学校の教員であった母は、困っている人は放っておけなかった。やがて、借金は家が建つほどの金額にふくれあがり、返せる額ではなくなった。私の家族は、だれも母がお金を貸し続けていることを知らなかった。母は、だれにも貸したお金のことを話さなかった。相手は母が誰にも話さないであらうという事を心得ていた。母は、終いには女が生活保護を受けていて困っているだろうと、わざわざお金を持つて行ってやっていた。

母が病院に入院し、着がえを探していると、タンスからお金を貸し続けた日記のようなメモが出て来た。私が気付き、やっと事件が発覚した。

女を呼び出すと、女はいきなり玄関で「土下座」をし、「申し訳ございません。もうしません。このとおりです。ゆるしてください」「孫の代までかかって、お返しいたします」と、巨体を丸め手をついた。「こんなに大金を何に使ってしまったの」と訊いたが返事が無かった。

立ち上がると女は「金融七社からお金を借りた事がある」と、今「土下座」をした事を忘れたかのように堂々とした態度で帰って行った。それを見送った父と私は、玄関で無言のまま立ちつ

くした。なんてことだ。

この土下座事件は、それで泣き寝入りとなった。女が返したお金は、この時の一万円だけ。金融七社からお金をかりた女は、家に平気で住んでいる。不思議で仕方がありません。

知人に相談したが、「裁判を起こしたら」とか、「代理人を立てて返済してもらったら」と平気で言った。この時、騒いでいたら家に火をつけられたり、殺されていたかもしれない。痴呆が来ている母に、そんな事はできない。相談した私が愚かだった。

弁護士と相談したが、家や土地を担保にした借金の証書がないのでは、話にならなかった。お金を貸し続けた日記のようなメモによると、昨日は一万円、今日は五万円。明日は十万円という貸方だった。弁護士は、「貸したお金も財産とみなされ税金の対象になります」とクールに言った。弁護士は、何の助けにもならなかった。

夫は「すごい女です。他でもやっています。対処の仕方がプロです。近所で絶交している人がいるでしょう。みんな恐いので泣き寝入りして黙っているのです」と言った。「なるほど」。それで私も我慢した。

平成十七年（二〇〇五年）四月二十五日、母は一度だけ自分一人で貸した金を返してもらいにいった事がある。家は留守で、その家の飼犬に腕や太ももを咬まれた。腕の肉は引きちぎられ、骨が見えるほどで、皮膚がぶらさがっていた。わが家の玄関、廊下、台所、風呂場は血だらけだった。私が外出していたので、使い古しの雑巾を患部に巻き、紐で縛ってから、その左腕をビニー

ル袋に入れて、何食わぬ顔で、父と並んで福知山線の列車脱線事故のテレビニュースを覗いていた。雑巾からは血が滴り落ちていた。「どうしたの？」と訊いても、「なんでもない」と答えるばかりだった。私が付き添って毎日病院に通院し、何針も縫った。

毎日同じ時間にタクシーを呼ぶと、「今、出はらっていますから、二十分ぐらい待っていたかないと。それでもよろしければ」などと言われるようになった。明らかに、悪臭のする汚い年寄りを通り越して白なシーツのかかったタクシーに乗せたくないのです。駅前まで歩いて行くと、ロータリーにはタクシーが沢山停まっていた。以後、病院には歩いて行く事にした。「歩くのは何ともない」と母が言った。母の手を引いて、悲しくて無言で歩いた。一ヶ月後に、なんとか治った。しかし、母は食が細くなり、体重は三十三キロ、痴呆も進行していた。

母が九十六歳になった時、私が、「お金を貸したら、返してもらってから、また貸すようにすればよかったのにね」と言うと、「そうだね」と答えた。もう、この頃には痴呆で何もわからなくなっていた。私は悔しくて声をあげて泣いた。

母は、自分が貧しかった若い頃の事も、すっかり忘れていた。食うや食わずの生活だったので、母の妹・三女（満枝）は胸を患って亡くなった。十七歳だった。母親（たつ）と三姉妹を親戚や近所の人が助けたという話を聞いたことがない。どのように生活をしていただろう。

母は、お金に困っている人を助けてやろうとしただけです。私は、なかなか納得できないでい

る。玄関で巨体を丸めて「土下座」した女の姿が頭から離れない。私が一人にいる時、暗い顔をしているのは、そのためです。人の一生で、女が「土下座」をするのを見た人が、どこにあるだろうか。これほどの悪夢は他にない。

事情を知らない人に言われた。「あなたばかりが、好い人生を送っている」と。「うらやましいのですか？ できる事なら代わってください。私の人生をあなたにあげます。あなたが私で、私がある。いかがですか？」。この悪夢を消し去りたい。どうすればいいのだろう。教えてください。

平成二十七年（二〇一五年）五月二十九日、夜七時三十分、NHK『金曜日』で特集「詐欺被害あなたはだまされない」を放送した。最後に具体的な防止策として「口に出して詐欺にあつた事を話したらどうでしょう」「経験を話すと気が楽になります」とまとめた。しょせん他人事だ。長い時間、期待して観たのに、あっさりしたまとめに、私はがっかりした。ゲストも、解決策になる事は言わなかった。ゲストは人選ミス。

隣りに住む女が詐欺師の場合、殺されたり放火されたりする危険がある事を誰も考えていなかった。のん気な番組だった。私は悔しさが倍増した。

テレビや映画のドラマでは、しばしば「土下座」のシーンがある。日本では、「土下座」をして「すみません。ゆるしてください。この通りです」と言うと、それで全ての事が終わる。だれも問題

にしないのは、昔からある日本伝統の文化だからにほかならない。「土下座」で全てを御破算にする日本の文化に腹が立ちます。「土下座」をしても何も解決しない。

「会いたい」悪夢

平成二十五年（二〇一三年）のNHK大河ドラマ第五十二作『八重の桜』では、会津国家老・山川家の長男、山川浩（演・玉山鉄二）が、八重の最初の夫・川崎尚之助（演・長谷川博己）が書き残した会津戦争の記録を綴った『鶴ヶ城籠城戦記』（『會津戦記』）を読みながら「あいてえなあ」と男泣きする場面がある。山川は、籠城戦で妻を亡くし、多くの知人、友人を亡くした。

日本では、十一月に入ると喪中の葉書が来る。普通は決まり文句が用意されていて、それに名前や亡くなった月日、年齢を入れ込んだものだ。その喪中葉書の中に母親を亡くした人からの物があった。「生んでくれてありがとう。感謝、感謝、感謝、感謝です。合掌」と書いてあった。その母親は九十九歳で亡くなった。

ある日、玄関に宗教の布教をする背広姿の紳士と、美しい女性が静かに立った。「お亡くなりになった親兄弟、ご親戚の人、お友だちに会いたいと思いませんか。この冊子を読むと会う事ができます。どうぞご覧ください」「結構です。間に合っています」「なぜですか」「理由が訊きたいのですか。そうですか。では話しましょう」。

玄関に立っている男と女に言った。「私の母は、近所の主婦にお金を貸し続け、ついに家が一軒建つほどになり、その主婦は借りたお金を返せなくなりました。この玄関のこの場所で土下座をしました。私と父がそれを見ていました。人の一生の中で、土下座を見たと言う人があるでしょうか。あなた方は、偉そうな人ですが、土下座を見た事がありますか？母は何も悪い事はしていません。貧しい人にお金を貸しただけです。それは、娘の私が土下座を見るためではありません。土下座を見た私は生きた心地がしませんでした。今も土下座女を引きずって生きています」。すると紳士風の人が言い返した。「私たちは、偉い人ではありません。お母さんは優しい人ではありませんか」と。「えっ、優しい？あなたは、私がうらやましいのですか。そうですか、わかりました。それでは、私と代わってあげます。私は、今の生活が、嫌で嫌でたまりません。呪われた生活をあなたにあげましょう。もうすぐ土下座をした女が犬をつれて平気で通りますよ。見て行かれるといいですよ」。「わかりました。これで失礼します」「えっ、なに、ちよつと待つてください。まだ話が終わっていません」。

二人は、静かに帰って行つた。美しい女性は、一言も言葉を発する事はなかった。終始、無言だった。勉強会があり、何か決まり事があるようだった。昔から日本には「沈黙は金」という言葉がある。

私は、だれかに助けてもらいたいのです。この生活を毎日していたくないのです。根底からくつがえしたいのです。心の底から笑える生活、清々しい気分を歌を歌いたいです。紳士風の人

が言った「お母さんは優しい人ではありませんか」と言う言葉が、時々思い出されます。

「迷惑メール」の悪夢

平成二十六年（二〇一四年）十二月二十六日、この日は仕事納めの日。パソコンを開くと「最終通告」というメールが来ていた。「何度かお客様へご連絡をさせていただいておりますが」と書いてあるが、一度もそのような物は来ていない。これは変です。

「裁判による法的手続き……お支払いの意思表示がない場合……身辺調査後に……双方お話し合いでの解決が望ましい……」。

何の事かわからないので、翌日、松田警察署に行った。「このような迷惑メールがきました。生活安全課に行くように夫に言われました。返信や電話は、いっさいしていません」と言った。すぐに対応してくれた警察官は、メールを読んでから内容を簡単にメモした。そして「コピーを取らせてください」と言った。

「このように届け出ましたが、警察では何をしてくれますか。私はどうすればいいですか」「警察では届け出を受け付けて書類を作り、指導に当たります」「そうですか。相手に指導をする時、私の名前を出さないようにしてください。私は、まだ殺されたくありませんから」。

警察官は、私の名前と住所と生年月日、年齢を問い、記録した。まるで私が犯罪者で、取り調べを受けているようだ。そして「何もしなくていいです。放置しておいていいです」と、私に指導をした。

「警察では何もしないのですか。この後も次々メールが送られて来たりしませんか。この男が私を殺しに家に来る事はありませんか」「ここに書いてある電話番号に電話をすると住所がわかったりしてしまいます。そうなると事件になってしまいます。メールが何度も来るようなら対処します」。

つまり、事件が起きないと警察は動かないようだ。これ以上、この若い警察官にからんでもしかたがないので、すぐすご帰宅した。ぐったり疲れた。

迷惑メールには電話番号が書いてあった。警察がその電話番号の住所に自宅捜査に入ることにはできないのだろうか。事件が起きないと動かないというのは、警察に届け出たかいないが、私は、迷惑メールの犯人にも、警察官にも怒っている。これほど気分の悪い事は無い。迷惑な話だ。その後、迷惑メールは送られてきていない。慌てて電話をしたり、お金を支払ったら大変な事になっていた。事件が多発するのが納得できた。

オレオレ詐欺でお金を取られた高齢者は、息子に一生叱られ続けてしまう。ますます絶縁状態になってしまう。残りの人生を平和に暮らそうとしていたのに。自殺者も多数いるようだ。手口は次第に悪質になっている。警察は取り締まらなくてはいけない。踏み込んだ捜査をしていたらきたい。これは現実の悪夢だ。

「電話詐欺」の悪夢

「おれおれ詐欺」が後を絶たない。それ以前は、「壺を買いませんか」「ピアノを買いませんか」

「山を買いませんか」「東京のマンションはいかがですか」などと電話がかかってきたものです。私は、傾向を分析して対策をたて、電話がかかってくるのを待っていた。

するとある日、「奥さん、お墓を買いませんか」という電話がかかってきた。「待ってました」と、私は用意していた次のような言葉を言った。「十万、二十万円の物を、電話で『では、それを一つください』なんて買う人はいませんよ」。すると、相手の方が上手だった。「奥さん、墓が十万、二十万で買えると思ってるんですか」と言った。私はゾツとした。このような電話は、からんだりしない方が身のためだと思います。家にまで押しかけて来られたら大変です。それからは、穏やかに「間に合っております。失礼いたします」と言う事に決めた。家族にも教え、みんなに復唱させた。

また、別の電話がかかって来た。用意しておいた言葉、「間に合っております。失礼いたします」と言うと、今度は「何が間に合っているんですか」と、独特の口調で切り換えして来た。私は、ますますゾツとした。それで家の電話は留守電とFAXだけの使用とした。本当に恐ろしい事です。

「ヤクザ」の悪夢

高倉健といえど主演をした映画『網走番外地』が有名。ドスを持った健さんが、一人でヤクザの親分の家に殴り込む。かっこいい。これは映画の中の話だ。

母が胃ろうを作った。その病院は秦野市の高台にあった。バスは一時間に一本。二台のバスが巡回している。昔はサナトリウムだったようだ。私は毎日見舞いに行った。

母を車椅子に乗せて手術室の前に行った。手術室の前の長椅子に二人の男が座っていた。説明書のような物を投げ出して大股を開き、二人で長椅子を占領していた。私が「すみません、腰かけさせて頂けませんか」と言うと、すぐに「すまねえ」と言つて説明書のような物をかき集め、席を詰めてくれた。その素早さ、素直な態度に驚いた。二人の男の会話が聞こえて来た。

「これから、どうする。小田原の長崎屋の前のクレープ屋は、もうおしめエだ。平塚の……」。そこに胃ろうの手術を終えた医者が手術室から出て来た。「○○さんですね」と、ひとしきり手術の説明をした。二人の男は黙っていた。一人の男が女医にむかつて「ねえさん、名前、なんちゅうの？」と訊いた。女医はひるむことなく「私？ 私の名前は○○です。許可なく酒を飲ませたり、何か食べさせたりしないで。亡くなつても責任が持てないわ」と毅然とした態度で言つた。この二人は小田原のヤクザだった。親分が胃ろうを作つたに違いない。

しばらくして母を見舞いに行つた日、真夏なのに黒い背広の男数人が駐車場で忙しそうにしていた。白い背広に真っ赤なネクタイの男もいる。今日はヤクザの親分の退院だと思つた。続いて母も退院した。胃ろうを作れば命は三年以上もつと聞いていたが、半年もしない内に母は亡くなった。享年九十六歳だった。私は、ぼう然と立ちつくした。

「死んだ」悪夢

私は三回、交通事故で「死んだ」ことがある。

一回目は、結婚した翌日、夫の実家の山形に行った。結婚祝いのお返しを配って回るのに、夫

が運転して義父の車で出かけた。帰宅直前、裏山の道で迷った。その道は、行き止まりだった。下り斜面の左側は崖で、右側は竹藪だった。前方は崖つぶちの行き止まり。車は前の車輪が、あと一息「危機一髪」の所で停止した。私は声が出なかった。このままでは、谷底へ真つ逆さまに落下して死んだ、車は爆発炎上と思いきや、車はバックして、かなり長いバックの後、正しい車線にもどり帰宅した。何事もなかったように「ただいま、もどりました」と、義母に言った。……それから四十年後、「あんな事も、あったわね」と言うと、「そうでしたか」と夫が言った。夫は忘れていた。

二回目は、神奈川県立足柄上病院の前の道を走っていた。夫が運転し、助手席に私が乗っていた。顔を上げると目の前に電柱があった。「ウアアアッ、もうだめ、死ぬ」。即死したと思いきや、夫がハンドルを切って助かっていた。「ビックリでしたね。道の真ん中に電柱があるとは思いませんでした」と夫も驚いていた。

次の日、自転車で通ると、工事の人が電柱を道から離れた畑の中に移動していた。「きっと、だれかが注意したのね。当然だわ」と思った。しかし、二人の主婦の立ち話が聞こえた。「電柱に激突した事故があったらしいわ。怖いわねえ」「でも、ここ病院だから、すぐ治療してもらえるから、いいね」「即死だったみたいよ」と。……それから三十年後、車で現場を通った時、「あの電柱が、道の真ん中の、ここにあって激突しそうだったわね」と言うと、「電柱？ 何の事でしょう」と夫が言った。夫は忘れていた。

三回目は、平成二十五年（二〇一三年）の春、大井町の美化センターからの帰り、第一生命の

見える国道に出る時、トラックが走つて来た。直線コースなのでスピードがある。ウチの車が発進してしまった。私は、トラックの運転手の顔を見た。目が合った。世にも恐ろしい顔だった。「死んだ」。正面衝突と思いきや、トラックは、そのまま走り去った。紙一重、ウチの車は左の下り車線を、何事もなかったかのように走っていた。下り車線に車がいたら、両方の車に激突だったかもしれないが、運よく他の車は走っていないかった。「アクセルとブレーキを踏み間違えた」と夫が言った。私は、ぐったりした。二人は、黙つたまま帰宅した。

それから半年後、奇妙な事がおきた。家の隣りのゴミ集積所が、「松田町」から「大井町」に変わった。理由はわからない。平成十七年四月から続けていた美化センターへのゴミ出しに終止符を打った。紙ごみを車に乗せて月に二回、大井町山田にある美化センターに持つて行く。個人の直接搬入は有料。それを平成二十六年夏、終了した。

「よかった」「助かった」「楽になった」「ほっとした」「やれやれだね」。夫と二人で胸をなでおろした。この言葉は、三ヶ月も四ヶ月も顔を合わすたびに交し合った。ゴミ出しは、それだけ私たちの生活に負担になっていた。これから高齢になって、夫が運転できなくなったらゴミ出しをどうするか悩んでいた矢先だ。捨てる神あれば拾う神あり。

わが家のゴミ出しは、近所の主婦が玄関で「土下座」をした事と関係がある。発端は、母が人助けをした事にある。困っている人にお金を貸した。主婦の家が組長になった時、組のお金の集金などで家に来られるのをさけるために組から抜けた。何も知らない町の人たち、特に民生委員は不思議がった。「僕たちは何も悪い事をしていないのだから、言わせておけ。堂々としていれ

ばいい」と夫が言った。私たちに関係のない過去の出来事だが、私たちの生活に負担として、暗く重くのしかかっていた。

それから半年、「安全運転で、お願いしますね」と言うと、「僕は運転がうまいですよ。信用してはいけませんね。乗ったら静かにして僕に任せてください。あなたは、ギヤーギヤー、ワー、うるさいよ」と夫が言った。トラックと正面衝突になりそうだった事は、忘れてしまったのだろうか。

結局、「死んだかも」という原因は、夫の運転にあるのだが、みんな忘れてしまっているのがすごい。今の世の中、神経が細かいと生きて行けない。バイタリティーが生死を分ける。

「助かった」悪夢

この悪夢は、助かったのに親としての罪悪感があり毎回出て来る。二人の娘が小さかった頃、箱根にドライブに行った。早雲山から大涌谷まで私たち三人は箱根ロープウェイに乗り、お父さんは下から車で行った。十二月末、シーズンオフの箱根は、紅葉も終わりがけ平日の午後は観光客もまばらでした。ゴンドラには私たち三人だけが乗っていた。つまり貸切。下降するゴンドラには五、六人が乗っていたので、その人たちに手を振った。上昇するゴンドラに乗った三人は興奮した。私たちが乗ったゴンドラの前後のゴンドラには誰も乗っていないかった。これから山の上を観光しようという人はいなかった。

上昇して行くゴンドラから下を見るとスケートリンクがあり、人が豆粒のようだった。「ほら、

スケートよ」と私が言った。その声は震えていた。高度恐怖症の私は、目が回るのを必死でこらえていた。気の持ちようだと思つて頑張つていた。吐きそうだった。小学生の長女が「♪秋の夕日に」と歌い出したので、幼稚園の次女と私が、それに続いて『紅葉』を歌った。世の中の嫌な事を忘れ、楽しい気分になった。娘たちは高い所が大好きで大喜びだった。

大涌谷の一番深い谷の真上に来たその時、ゴンドラがガクンと大きく揺れ、ロープウェイは上りも下りも停止した。そのまま動かなくなつた。どうしたのかなと思つた。長女は、「どこかに出口が無いかな?」と言つてドアに手をかけたりして出る場所をさがした。当然だが、ゴンドラは内側から開かないようになっていた。次女は座席に膝をついて反対座りをして外を見ていた。赤いボンボンの付いた毛糸の三角帽子を被つていた。「きつとお父さんが迎えに来てくれるよ」と言つた。次第に時が過ぎ、硫黄の匂いがゴンドラの中にまで入つて来た。「ゆで卵の匂いだね」「美味しい匂い」「そうだね」。

私は、靴を脱いで膝を抱えてゴンドラの床に丸くうづくまつた。高校生の時、社会科の先生が「高い所から落ちる時、体を丸くしていると助かる可能性がある」と話されていた事を思い出したのだ。「神さん仏さん皆さん、お願い。助かったら何でもします。だから助けてッ」。自分だけ助かりたいという思いが脳裏を駆け巡り、娘たちの事は忘れた。

次の瞬間、ゴンドラがガクンと大きく揺れて動き出し、一瞬で終点の大涌谷駅に到着した。係りの人が、「なんか変だったか?」と言つているのが聞こえた。子どもたちはお父さんに駆け寄り「とつても、おもしろかったんです」「楽しかったんです」と声を弾ませて言つた。お父さんは、「こ

ちらから見ていたらゴンドラが停止して、事故かな？これはまずい。助けに行くようなと思った。窓の所に赤い三角帽子が見えたので、生きている、大丈夫と思った」と言った。

車で帰宅した。車中、私は無言だった。言葉がなかった。しばらくは童謡の会で『紅葉』が歌えなかった。「二重唱で歌いましょう」というリクエストもあつたが無視した。歌つたら悪夢が蘇えるに決まっている。

あれから六十年が経過した。「箱根ロープウェイって、ひと駅だけだったのに、やけに乗車券が高かったな」と思っている。人間、助かれば苦難を忘れる。

「NHKの自慢」の悪夢

平成二十五年七月十四日（日曜日）の『NHKのど自慢』は、山梨県富士吉田市富士五湖文化センターふじさんホールから生中継。前半は鐘二つ、後半は合格者が続出した。なんと、九十五歳の女性が『赤とんぼ』を歌い特別賞だった。「毎周年寄りが特別賞だ」と言う人があるようだが、高齢なのに若い人に混じって歌う、新しい事に挑戦する勇氣に拍手を送りたい。小学校の教員だったというその女性に司会者の小田切千さんが訊ねた。「元気の秘訣は何ですか？」「私は若い頃から病気をした事がありません」「歌を歌って、お元気で」。ゲストの天童よしみさんは、『ふるさと銀河』を歌った。北島三郎さんは、『百年の蟬』を歌った。プロは、さすがにうまい。

プロスキーヤーで登山家の三浦雄一郎氏が「夢は大きい方がいい。そうすれば、必ず達成させ

るように目標に向かって努力する。すると元気が出る」と言われた。「なるほど」。三浦さんは、平成二十五年五月二十三日、八十歳で三度目のエベレスト登頂に成功した。その訓練、日々の努力はすごい。意志が強い人です。

私も三浦さんを見習って何か目標を立てよう。そうだ、百歳の誕生日に『NHKのど自慢』に出よう。四十五キロの体重をキープするために、日々、運動と食事に注意した。風邪が一番の敵。風邪をひくと体力が落ちる。喉を傷める。

いよいよ満百歳になった。山形県天童市文化会館大ホールに『NHKのど自慢』が来た。私が歌うと合格の鐘がなった。「キヤー合格、合格」と言って司会の中村敦夫さんに抱きついた。私は小さいので頭が中村さんの顎に当たった。中村さんは口の中を切って血が出た。白いピエール・カルダンのスーツが真っ赤に染まった。「すばらしい歌声でしたねえ。お年とお名前をどうぞ」と言うのがやつとだ。「小田原から来ました池田小百合、百歳です」。すると、会場から「おおッ!」というどよめきと共に大きな拍手があった。「元気の秘訣は何ですか」と訊かれた。「歌が好きです」と答えた。レベルが低くて合格者は私一人だったので、今週のチャンピオンと特別賞ももらった。「歌を歌って、これからお元気で」と、大好きな木枯し文次郎役の中村敦夫さんに言われて、嬉し泣きをした。

ゲストは松田聖子と郷ひろみ。松田聖子は、ヒラヒラの付いているピンクのミニスカートで歌った。頭には大きな赤いリボンをつけている。歌い終わると「ありがとう」と言ってから、聖子スマイルでウインクをし、唇を舐めた。「うーん、かわいい」。郷ひろみは、アメリカでレッスンを

受けているという発声で歌った。デビュー当時と何も変わっていない。歌い方は変えようがない。ファンはヒット曲を聴きたいのです。「ゴー、ゴー、ひろみ」。郷ひろみが私の手を引いてくれた。「はいはい、こちらですよ。転ばないように小百合おばあちやま」。これぞ悪夢。

ある日、なにげなく「のど自慢に出てみたら」と父が言った。私は聞き流したが、それは、父の遺言になった。本当に出る時には、何を歌おうかな。

究極の悪夢

平成二十六年（二〇一四年）八月に湯川遥菜さん、十一月にジャーナリストの後藤健二さんがそれぞれシリアに渡航後、行方不明になったことが発覚した。

イスラム国に拘束された日本人二名の引き渡し条件に二億ドルの請求があった。私は二億ドルという数字に驚いた。安倍首相は、日本政府が人質の存在を知っていたにもかかわらず、一月の中東訪問でイスラム国の影響を受ける国々への支援を表明した。この事が、イスラム国側を刺激した。それが二億ドル。そもそも、この二億ドルは日本国民の税金です。相談も無く安倍首相のポケットマネーのように使ってもらっては困る。「人道支援」「国際貢献」「献金」という言葉に日本人は弱い。国内では、東日本大震災や阪神・淡路大震災の後、借金を抱えた人々の暮らしの目途が立っていない。

「クリスチャンは皆殺しだ」。この事件を受けて、国は水陸両用戦車をマスコミに披露し、自衛隊に五十二台購入する事を決めた。日本列島周辺を守るためだという。次に安倍首相は憲法を改

正すると明言した。目的は多国籍軍の後方支援に自衛隊を参加できるようにするためです。今回のように海外での人質事件があった場合、日本国憲法の第九条があつては対処できないからだ。中東諸国への人道支援は、先の二億ドルに加算して援助金を送る事にし、「テロには屈しない。断固戦う」と表明した。事件が安倍政権のテロ対策を正当化する口実になつてしまった。

その後、拘束されていた日本人二人は残酷な方法で殺されてしまった。人質となつて安否不明だったヨルダンのパイロットは、すでに殺害されていた。パイロットの死亡が確認されると、すぐにヨルダン人は人質の交換条件にあつた死刑囚二人を処刑した。さらにヨルダン軍はイスラム国の重要拠点に対し空爆を行った。ハムラビ法典には「目には目を、齒には齒を」という教えがある。人が人を殺し合う。これでいいわけではない。

NHKは、二月中旬から「過激派組織ISイスラミックステート」という呼び方に変更した。「イスラム教」の人たちへの配慮、「イスラム国」は「国」ではないことなどが主な理由。

では、私たちに何ができるのか。私が、「イスラム国」の非人道的なやり方に怒っている頃、宗教の布教をしている女の人たちが玄関に来た。「全世界にキリスト教徒は大勢いるのに、あなたがあは、なぜ助けようとしなかったのですか」と尋ねた。すると「近々お手紙を書こうと思つていました」と答えた。私は開いた口がふさがらなかつた。

日本は「平和憲法」を持つている。「戦争の放棄」「戦力の不保持」「交戦権の否認」。日本国憲法を「平和憲法」と呼ぶのは憲法前文の記述および第九条の存在に由来している。これを生かした武力排除の国を目指すべきです。